

# ダニエル書 - 第五十九号

最後の預言の秘密の開示：ユダ族の獅子による最高潮の封印の開封

Jeff Pippenger

2024-01-23

猶予期間の終わりの直前に、ユダ族の獅子によって最後の預言の奥義の封印が解かれ、その開封によってもたらされる知識の増加を理解するのは賢い者たちである。黙示録の二人の証人は、その時に解かれる事柄の一部に光を投げかけている。

ここに知恵がある。悟る者は獣の数を数えよ。それは人の数であり、その数は六百六十六である。... そしてここに、知恵ある心がある。七つの頭は、女が座っている七つの山である。黙示録 13:18、17:9。

教会と神の律法に対して戦いを挑む最後の権力は、小羊のような角を持つ獣によって象徴された。それはアメリカ合衆国である。これは聖書の預言における第六の王国であり、その王国の構造は第五の王国のそれと同じ構造（像）である。やがてそれは教会が国家を支配する王国となり、その同じ体制を全世界に受け入れさせる。間もなく到来する日曜法の時に、アメリカ合衆国において教会と国家の結合が完全に確立される。

「獣の像」は、プロテスタント諸教会が自らの教義を強制するために国家権力の援助を求めるときに形成される、背教的プロテスタンティズムの一形態を表している。「獣の刻印」については、なお定義されていない。『大論争』445ページ。

獣の像と獣の印は二つの異なる象徴である。しかし、獣の像が完成に至るのは日曜法の時である。

プロテスタント諸教会による日曜日遵守の強制は、教皇権-すなわち獣-の礼拝の強制である。第四条の戒めの要求を理解しながら、真の安息日の代わりに偽りの安息日を守ることを選ぶ者たちは、それによって、それを唯一命じている権力に服従と敬意を示しているのである。ところが、世俗の権力によって宗教的義務を強制するというその行為自体において、教会は自ら獣の像を形づくることになる。ゆえに、アメリカ合衆国における日曜日遵守の強制は、獣とその像の礼拝の強制となるであろう。『大争闘』448、449頁。

日曜法の制定時、アメリカ合衆国憲法は完全に覆され、この国は義から完全に離反する。その後、サタンの完全な支配のもとで、アメリカ合衆国は、アメリカで確立されたばかりの教会と国家の体制と同じ体制を世界に受け入れさせる。世界政府は国際連合であり、ローマ教会はその関係を支配する教会である。

「世界は嵐と戦争と不和に満ちている。だが、人々は一つの頭-すなわち教皇権-のもとに結束し、神の証人において現される神に敵対する。」『証言』第7巻、182。

預言において獣の像として表されている教会と国家の体制は、また、竜と獣と偽預言者からなる三者連合でもある。黙示録第17章の十人の王、すなわち第七の頭は、竜の勢力を表している。

「王や支配者や総督らは、自らに反キリストの烙印を押し、聖徒-すなわち神の戒めを守り、イエスに対する信仰を持つ者たち-と戦いを挑みに行く竜として表されている。」牧師たちへの証言、38.

『十人の王』は国際連合を表し、その宗教は心霊主義である。また、偽預言者の宗教は背教的プロテスタント主義であり、獣の宗教はカトリックで、これは単にキリスト教を名乗って覆い隠された心霊主義にすぎない。

「神の律法に反して教皇制度の確立を強制する布告によって、わたしたちの国は義と完全に縁を切ることになる。プロテスタント主義が深い隔たりを越えてローマの権勢の手を取ろうと手を差し伸べ、さらに深淵を越えて心霊主義と手を結び、この三重の連合の影響のもとに、わが国がプロテスタントかつ共和政の政府としての憲法のあらゆる原則を否認し、教皇的な虚偽と惑わしの流布のための規定を設けるとき、わたしたちは、サタンの驚異的な働きがなされる時が来ており、終わりが近いことを知るのである。」『証言』第5巻、451頁。

日曜法のとて、竜と獣と偽預言者の三重の連合が成就する。その後、アメリカ合衆国は、国連による世界統一政府を受け入れるよう世界に強制する。というのも、太陽礼拝の強制のゆえにイスラムがアメリカ合衆国に裁きを下し、日曜法のとて世界は大きな危機に投げ込まれるからである。次いでサタンがキリストを装って現れ、アメリカ合衆国は、政教一致の世界体制を受け入れるよう世界に強制するとともに、休日として日曜日を受け入れることも強いる。こうして、アメリカ合衆国で起こったのと同じ試練の過程が、全世界にもたらされる。

「諸外国はアメリカ合衆国の手本に倣うだろう。たとえ米国が先頭に立つとしても、同じ危機が世界の至る所で私たちの民に及ぶであろう。」『証言』第6巻、395頁。

国家の背教が国家の滅亡を招くという原則は、諸国が太陽の日を礼拝の日として受け入れるとき、各国に及ぶ。激化する危機は、十人の王が「罪の人」である教皇とともに統治する「一時間」である。彼らは、イスラムに対する激化する戦争に対抗して世界を統一するには教皇制の道徳的権威が必要だと信じるように導かれたため、自分たちの第七の王国を教皇の権威に譲り渡すことに同意した。1798年には、国際連合はまだ歴史に登場していなかった。

あなたが見た十の角は十人の王であり、彼らはまだ国を受けていないが、獣と共にひと時、王としての権威を受ける。彼らは心をつにし、自分たちの権威と力を獣に与える。彼らは小羊と戦いを交えるが、小羊は彼らに打ち勝つ。小羊は主の主、王の王だからである。また、彼と共にいる者たちは、召され、選ばれ、忠実な者たちである。ヨハネの黙示録 17:12-14。

これまでも常にそうであったように、教皇の場合、王たちが教皇権に神の民に対する迫害を遂行するための力を与える。そして、小羊と戦いを交えるのは十人の王たちだが、彼らは「罪の人」の指図でそうしている。「罪の人」はまた、イザヤ書第4章で七つの教会が取りすがる「男」でもある。

その日、七人の女が一人の男にすがりついて言う。「私たちは自分のパンを食べ、自分の衣服を着ます。ただ、私たちがあなたの名によって呼ばれるようにしてください。私たちの恥を取り除いてください。」その日、主の若枝は麗しく栄え、地の実りは、イスラエルの逃れの者にとって、すぐれて美しいものとなる。イザヤ書 4:1, 2

「七人の女たち」は、教皇制（罪の人）が、すべての国々を支配しているのと同様に、地上のすべての教会をも支配していることを表している。教会が避けようとしている「非難」とは、日曜礼拝の要求を拒否することによる「非難」のことである。忠実に安息日を守る者たちは、その忠実さのゆえに迫害され、イスラム教もまた太陽の日を守ることを拒むだろう。米国が教皇制と国際連合の間で取り決める合意は、地上に平和を打ち立てるためにイスラムに対する戦争を受け入れるよう世界を導くには、罪の人の道徳的権威こそが必要だ、というものである。

しかし、時と時期については、兄弟たち、あなたがたには私が書き送る必要はありません。あなたがた自身がよく知っているとおりに、主の日は夜の盗人のようにやって来るのです。人々が「平安と安全だ」と言っているとき、そのとき突然の滅びが、身ごもった女に産みの苦しみが臨むように、彼らに襲いかかり、彼らは逃れることができません。しかし、兄弟たちよ、あなたがたは暗闇の中にいるのではないので、その日が盗人のようにあなたがたを襲うことはありません。あなたがたはみな光の子、昼の子です。私たちは夜や暗闇の者ではありません。テサロニケ人への第一の手紙 5:1-5.

聖書の預言で語られる「平和と安全」というメッセージは、常に偽りのメッセージとして示されており、平和と安全が存在しない時期にのみ理にかなう。平和と安全が存在しているときに「平和と安全」というメッセージを掲げる理由はない。イスラム教はあらゆる平和と安全を奪う。偽りのメッセージに伴う「突然の滅び」は、「産みの苦しみ」の中にある「女」のように、次第に激しさを増していく滅びである。第三の災いの最初の陣痛は2001年9月11日だった。

預言者エリヤとバプテスマのヨハネにおいて、教皇権の欺きが例証されている。アハブは、エリヤの神が天から火を降らせたゆえに真の神であることをイゼベルに知らせるため、サマリアへ引き返した。そのとき、アハブは、イゼベルがエリヤに対する憎しみについて彼を欺いていたことに気づいた。同じ憎しみと欺きは、ヘロデが誕生日の宴でサロメに国の半分を約束したときにも示された。サロメはヘロディアの娘であった。したがって、ヘロデは竜、ヘロディアは教皇権、サロメは偽預言者であった。

物語では、サロメの踊りの欺きの力が用いられ、ヘロデ（十人の王）に、自らの王国の半分を教会（女）に渡すよう仕向けた。その女（サロメ）は母（カトリック教）の指示のもとにあり、ヘロデが、ヘロディアのヨハネに対する態度がイゼベルのエリヤに対する態度と同じだと知ったのは、手遅れになってからだった。いずれの場合も、安息日を守る者たちは死ななければならない。

イスラムは、段階的に、しかし急速に地球から平和と安全を奪い去り、その過程で人類をイスラムに対抗して結束させる。イスラムの急速にエスカレートする戦争は、終末の時代に世界的な「獣の像」を確立するために用いられる論拠を表している。世界（十人の王）にもたらされる欺きはアメリカ合衆国（サロメ）によって仕組まれ、世界はイスラム

に対抗して団結しなければならないと信じ込まされる。だが彼らがそれに気づくのはあまりにも遅く、その取り決めは安息日を守る者たちを迫害するために用いられる単なる策略にすぎなかった。強要されて第七の王国を彼女に与えることに同意したにもかかわらず、その欺きは十人の王がその娼婦を憎む理由の一部となる。

あなたが獣の上に見た十の角は、淫婦を憎み、彼女を荒れ果てさせ、裸にし、その肉を食らい、火で焼き尽くす。というのは、神が彼らの心に、ご自身の御旨を成し遂げ、心をつにして、神の言葉が成就するまで彼らの王権を獣に渡すようにと、思いを与えたからである。黙示録 17:16、17。

国連のグローバリストたちは、単に地の「王たち」であるだけでなく、「商人たち」としても表されている。したがって、グローバリストは政治的権力と経済的権力から成っている。ヨハネに黙示録17章と18章の幻をもたらしした天使の目的は、ツロの大淫婦の裁きをヨハネに示すことにあった。これら二種のグローバリストは、教皇権の死を嘆き悲しむ。

それゆえ、彼女の災いは一日のうちに来る。すなわち、死と嘆きと飢饉である。彼女は火で徹底的に焼き尽くされる。彼女を裁く主なる神は力ある方だからである。彼女と姦淫を行い、彼女とともに贅沢に暮らしてきた地の王たちは、彼女が焼かれる煙を見て、彼女の苦しみを恐れて遠くに立ち、彼女のことで嘆き悲しみ、こう言う。「ああ、ああ、大いなる都バビロン、力ある都よ！一時間のうちにあなたの裁きが来た。」地の商人たちも彼女のことで泣き、嘆く。もはやだれも彼らの商品を買わないからである。黙示録 18:8-11

商人たちも王たちも、遠く離れて立ち、「ああ、ああ」と叫ぶ。「ああ」に当たるギリシア語は、黙示録第8章では「災い」と訳されている。

そして私は見た。また、天の中空を飛ぶ一人の天使が大声でこう言うのを聞いた。「災いだ、災いだ、災いだ。地に住む者たちに、これから吹き鳴らされる三人の天使のラッパの残りの響きのゆえに！」黙示録 8章13節。

三つの災いは第五、第六、第七のラッパを表しており、それらはイスラム教の象徴である。第十八章では、王たちも商人たちも船長たちも、三度「ああ、ああ」と叫ぶ。

地上の王たちは、彼女と姦淫を行い、彼女とともに贅沢に暮らしてきた者たちで、彼女が焼かれる煙を見ると、彼女を嘆き悲しむ。彼らは、その苦しみを恐れて遠くに立ち、「ああ、ああ、大いなる都バビロン、強大な都よ。たった一時間のうちにあなたの裁きが来た」と言う。... これらの品々の商人で、彼女によって富を得た者たちも、彼女の苦しみを恐れて遠くに立ち、泣き悲しんで、こう言う。「ああ、ああ、大いなる都よ。細布と紫と緋の衣をまとい、金や宝石や真珠で飾られていた都よ。たった一時間のうちに、これほどの富が無に帰してしまったのだ。」また、すべての船長、船に乗り組む者たち、船員、そして海で商う者は皆、遠くに立ち、彼女が焼かれる煙を見て叫び、「この大いなる都に比べられる都がどこにろうか！」と言った。彼らは頭に塵をかぶり、泣き悲しんで叫び、「ああ、ああ、その大いなる都よ。海に船を持つ者は皆、その豪華さのゆえに富を得たのに、たった一時間のうちに彼女は荒れ果ててしまった」と言った。黙示録 18:9-10、15-19。

教皇権への裁きが執行されるその「時」とは、「黙示録11章の時」、すなわち「大地震の時」のことであり、それはアメリカ合衆国における日曜法から始まり、ミカエルが立ち上がって人類の猶予期間が閉じられるまで続く、日曜法の時期を表している。大淫婦を憎んでいながら、なおもひとときの間、自分たちの王国を彼女に与えることに同意したグローバリストたちは、「わざわざいだ、わざわざいだ」（ああ、ああ）を三度繰り返すだけでなく、「この大いなる都に並ぶ都がどこにあるのか」とも問う。その問いはエゼキエル書でも問われている。

彼らはあなたに向かって声をあげ、激しく叫び、頭に塵をかぶり、灰の中で転げ回る。彼らはあなたのためにすっかり頭を剃り上げ、荒布を身にまとい、心の痛みと激しい慟哭をもってあなたのために泣く。嘆きながら、彼らはあなたのために哀歌を唱え、こう言ってあなたを悼む。「海のただ中で滅びたツロのような町が、どこにあるか。あなたの商品が海から出て行ったとき、あなたは多くの民を満たし、あなたの富と商品の多さによって地の王たちを富ませた。水の深みで海によって打ち碎かれるそのとき、あなたのただ中にあるあなたの商品も、あなたの一団も、みな倒れ去る。島々の住民は皆あなたに驚き、その王たちはひどく恐れて、顔色を変える。諸国の商人はあなたに口笛を鳴らしてあざける。あなたは恐れおののきとなり、もはや二度と存在しない。」 エゼキエル書 27:30-36

エゼキエルはその都市を「タイラス」と特定し、それを「海のただ中で滅ぼされた者」としている。イザヤは、ツロ（タイラス）の淫婦について語っており、彼女は黙示録の大淫婦、すなわちカトリック教会でもあり、さらに彼女を「冠を授ける都」とも特定している。

これは、その古さが太古の昔にさかのぼる、あなたの喜びの都なのか。彼女は自らの足で遠くへ行って寄留するようになる。冠を授ける都ツロ、その商人は君侯、その交易者は地の尊貴な者たちである、そのツロに対して、この計りごとを誰が立てたのか。万軍の主がそれを定められたのだ。あらゆる栄光の誇りを汚し、地のすべての尊貴な者を卑しめるために。イザヤ書 23:7-9。

教皇制は「冠たる都」である。というのも、それは自らを、三重の連合の上に女王として君臨すると主張しているからだ。

彼女がどれほど自らを栄えさせ、贅沢に暮らしたか、その分だけの苦痛と悲しみを彼女に与えよ。彼女は心の中で言う。「私は女王として座しており、やもめではない。悲しみを見ることはない」と。黙示録 18:7

エゼキエルは、タイラスへの哀歌の中で、「海のただ中」で淫婦への裁きが執行されると言った。

主の言葉が再びわたしに臨み、言われた。「いま、人の子よ、ツロのために哀歌を唱えよ。」…タルシシュの船はあなたの市場であなたを歌い、あなたは満たされ、海のただ中で非常に栄えた。あなたの漕ぎ手たちはあなたを大水の中へ運び入れた。東風が海のただ中であなたを打ち砕いた。エゼキエル書 27:1、2、25、26。

「東風」こそが、冠たる都ティルスに裁きをもたらすのであり、この「東風」はイスラムの象徴である。十人の王がイスラムに対して仕掛ける戦いこそが、終末の教皇権

を滅ぼす。さらに、十人の王が自分たちが欺かれていたことに気づくことも、彼らの心に恐れを生じさせる。

その立地の麗しさにおいて、全地の喜びであるのは、北の方にあるシオンの山、大いなる王の都である。神はその宮殿において、避け所として知られている。見よ、王たちは集い、共に進み行った。彼らはそれを見て驚嘆し、うろたえ、急いで逃げ去った。恐れがその場で彼らをとらえ、産みの苦しみをする女のような痛みが彼らを襲った。あなたは東風をもってタルシシュの船を打ち砕かれる。万軍の主の都、われらの神の都において、われらが聞いたとおり、われらは見た。神はこれをとこしえに堅く立てられる。セラ。詩篇 48:2-8。

グローバリストたちは、エルサレムの都によって表される神の御国に目を向けながらも、彼らの頭として「あの大いなる都」バビロンを選んだ。神がその大いなる都を裁かれるとき、彼らは自分たちが滅びることを悟って泣き悲しむ。というのも、彼らを選んだその大いなる都が、イスラム（東風）が彼らにもたらした戦いによって、海のただ中で打ち砕かれるからである。そしてその戦いは、産みの苦しみのように、段階的に激しさを増していく戦いである。

彼らが教皇権のために迫害してきた神の御国は、ダニエル書第2章で表されており、そこでは「これらの〔グローバリストの〕王たちの日に」神がご自身の永遠の御国を打ち立てられると告げられています。

そして、これらの王たちの時代に、天の神は一つの王国を打ち立てられる。それは決して滅びることがなく、その王国がほかの民に渡されることもない。かえって、それはこれらすべての王国を打ち砕いて滅ぼし尽くし、とこしえに立つ。ダニエル書 2:44

ミラー派は、自分たちは「これらの王たちの日」に生きていと信じていたが、黙示録17章の十人の王はまだ歴史に登場しておらず、実際には、まさに今ようやく姿を現しつつある。ミラー派は正しかったが、彼らの視野は限られていた。黙示録17章と18章の王たちの日に打ち立てられる神の国は、後の雨の時期に当たる。

私は、あらゆるものが目の前に迫る危機に鋭く目を向け、思いを張りつめているのを見た。イスラエルの罪はあらかじめ裁きに付されなければならない。すべての罪は聖所で告白されなければならない。そうしてこそ働きは進む。今すぐにそれをしなければならぬ。苦難の時の残りの者はこう叫ぶだろう。「わが神、わが神、なぜわたしをお見捨てになったのですか」

後の雨は清い者たちの上に降ろうとしている——そのときには皆、以前のようにそれを受けよう。

四人の天使が手を離すとき、キリストはご自分の御国を打ち立てられる。できる限りのことをしている者以外は、誰も後の雨を受けない。キリストは私たちを助けてくださる。すべての人は、神の恵みにより、イエスの血によって勝利者となり得る。天のすべてがこの働きに関心を寄せている。天使たちも関心を寄せている。Spalding and Magan, 3.

後の雨の時期、天使たちが四つの風を解き放つとき、「これらの王たちの時に」キリストはご自身の御国を打ち立てる。後の雨は漸進的であり、第三の災いが歴史に到来した2001年9月11日に降り始めたが、諸国民の怒りは直ちに抑えられた。それは勢いを増し続け、合衆国での日曜令に至ると、国家的破滅をもたらす。そして、その激化する裁きは、他のすべての国々が合衆国の例にならうにつれて続き、そのために同じ裁きを被る。それは恩恵期間の終わりまでエスカレートしていく。それは、産みの苦しみにある女のように進んでいく。

次の記事で七つのうち第八の存在の考察を続けます。

真理を唱える者たちがサタンに仕えている限り、彼の地獄のような影が、神と天を見る彼らの目を遮ってしまう。彼らは初めの愛を失った者ようになる。彼らは永遠の現実を見るができない。神が私たちのために備えておられるものは、ゼカリヤ書の3章と4章、そして4章12節から14節に表されている。『わたしはさらに答えて彼に言った、「二つの金の管を通して、自らのうちから金の油を注ぎ出しているあの二本のオリーブの枝は何ですか。」

彼はわたしに答えて言った、「これらが何であるか、あなたは知らないのか。」  
わたしは言った、「いいえ、主よ。」すると彼は言った、「これらは、全地の主のそばに立つ二人の油注がれた者である。』

主はあらゆる備えに満ちておられる。主に手段の不足はない。私たちの信仰の欠如、地上的な心、軽薄な言葉、会話に現れる不信のために、暗い影が私たちを取り巻くのである。キリストは、全く麗しい方、万の中にひとときわ優れた方として、言葉や品性に現されていない。魂が虚栄に向かって自らを高ぶらせることに満足しているとき、主の御霊はそのためにほとんど何もしてやることができない。近視眼の私たちは影こそ見ても、その彼方の栄光を見るができない。御使いたちは四方の風を押さえている。四方の風は、怒れる馬に譬えられ、手綱を振り切って地の全面を駆けめぐろうとし、その跡に滅びと死をもたらそうとしている。

「永遠の世界のまさに瀬戸際にあって、なお私たちは眠っていてよいのであろうか。鈍く、冷たく、死んだようであってよいのであろうか。ああ、私たちの諸教会において、神の霊と息吹とがその民のうちに吹き込まれ、彼らが自分の足で立って生きるようになることを、どれほど願うことか。私たちは、その道が狭く、その門が細いことを見なければならぬ。しかし、私たちがその狭い門を通るとき、その広がりには限りがない。」『Manuscript Releases』第20巻、217。